

考えることを考える—教養演習の新しい試み

古 谷 圭 一

1. はじめに

本学において入学してすぐに履修する「教養演習」は、それ以後の大学における学習のモデル・タイプを大学についての知識が固まる前に決定する重要な位置を占めている。その点で、われわれが学生に期待する勉学のあり方を適切に指導し、それ以後の学生の才能の開花に導くために1年次の学習内容は学生の知的レベルに応じた高い関心を喚起するものでなければならない。現在の大学受験システムは急激な変化に曝されているとはいえ、基本的には、知識偏重の暗記中心学習がほとんどで、「勉強＝暗記」の図式をもって学生は大学に入学してくる。この傾向は一般社会でも同じく、例えば、テレビのクイズ番組でも知識の量をなるべく短時間で吐き出すことを競う番組が多いことでもうなずけよう。ところが、大学における研究を中心とした世界はこれとはちがった知識生産のための才能を育てることがその最大の課題であり、すべての学科目がそれを目指していると言っても過言ではないであろう。それとともに、実は、一般社会においても知識生産が必要であり、学生が社会人として卒業していく時に期待されているのはこの知識生産技能ではないであろうか。これまでの大学教育では、学問的事実を講義することにより学生は間接的にこれらの知的生産技能を感得し、ゼミナールなどの個人的指導によってそれを直接的に伝えることが行われてきた。

筆者は、前任校における化学専攻の大学院生を対象とした教育において、しばしば成績の良い学生に創造的能力において欠けるものがあり、それらは

自分で知識を創造する喜びを知らず、参考書や指示に依存してそれらを使いこなすことのみ上手であるのを経験した。このため、このクラスの29名を対象として『「考えること」とは何か』のアンケートをとり、内容の分布を調べた。その結果、16名が受動的な「気持ちの確かめ」、「理解を深める努力」、「知識による整理と連想」、「情報の理解と整理」などの回答をし、論理性、創造性、仮説検証などの積極的側面については13名と過半数を割った。

本来、「知る」、「考える」には、受動的に知識を「得る」、「蓄積する」のみではなく、「創る」、「迷う」、「耐える」、「発見する」などの側面があり、その基礎には、前者においては、与えられる客観的なものを「信じる」のみであり、後者には、見かけの客観性をそのままには信じず主観的にそれを「確認する」過程があるが、わが国の初等中等教育においてはそれがおろそかにされ、そのまま、大学生活を始めるに至っている。

本学において1年生を対象とした教養演習を担当するにあたり、「考える」ことの中にある積極的側面を楽しく理解でき、自分の中にある新しい能力の存在に気づくことにより、偏差値偏重の価値観からの脱却が可能となるカリキュラムを作成実施することが現在極めて必要であることを意識して、本論文で述べる内容の実践を試みてきた。

このような試みは東京大学教養学部における「知の技法」⁽¹⁾が挙げられよう。しかしながら、その内容は難しく、現在の学生の知的レベルでは理解が困難である。島田⁽²⁾は、企業における能力開発に彼の大学院講義の経験より、現在の大学の創造性、想像性教育が欠けていることを述べ、現代社会における企業活動においてこれが極めて重要であることを指摘している。このための具体的な教材について、児童を対象としたバーンズの本⁽³⁾は発想としては極めて斬新であるが教室での使用には適していない。イークの本⁽⁴⁾は企業における能力開発教材であるが、その内容は大学生の演習には散漫に過ぎ1学期間の演習としては適していない。

本カリキュラムはゲーム、クイズを中心としたもので実質的には小学校か中学校のレベルであるとの意見もあるかもしれない。確かに、現在行なわれている総合学習において行なわれるべき内容である。しかしながら、そのよ

うな教育が行なわれないうまに大学に入学してくる学生にはどうしても必要な内容であろう。

II. 内容

以下に12回に及ぶ授業内容について説明する。本来は一学期15週であるが、この講義は月曜日に当たっているため12回となった。

第1回 「考えるということ」

目的：この演習の目的の紹介、「考える」、「勉強する」ことの意味について、従来の内容とは違う勉強の意味、考えることの意味を発見させ、その養成が大学教育の目的であり、社会によって期待されているものであることを学ぶ。

資料：島田論文⁽²⁾の中の図をコピーして配布、同じく OHP で映写する。

内容：(1)「考える」、「勉強する」ということはどういうことかについて、回答メモを提出させる。

(2)「技術と経済」誌における島田論文の紹介。

初回であるので、講義形式をとり緊張を和らげる。時間があったら簡単な自己紹介も効果的である。

宿題：「勉強」、「考える」、「おもう」、「まなぶ」に関して、国語辞典、類語辞典、英和辞典、和英辞典、英英辞典、シソーラス、漢和辞典などを用いてこれに相当する英単語、漢字をなるべく多く探し出してそれらの意味と相互の違いを調べて報告書に書く。

目的：現代の学生は、辞書を利用することが極端に少なくなっている。これらの教科書にはその個所に適合する単語だけが註としてすでに掲載されている。また、英単語もコンピューター索引のため、全項目を調べることがなくなっている。このため、これらの言葉のひろい範囲を実感させ、辞書の面白さを体験させる。

第2回の演習のはじめには、提出された「考える」の内容を、KJ法^(5,6)を用いたマップ・プリントを配布し、その広がり及各要素の関係を説明する。受動的な単なる理解、知識、まとめの他に、創造、論理性、真理探究な

ど積極的「考える」の領域があることを理解させ、これまでの「勉強ができる」の規範で自分を規定している劣等感からの解放を示唆する。

第2回 「答えはひとつではない」

目的：絵画の印象についてブレイン・ストーミングで解答をつくる。これにより、絵画の伝える内容について自分の表現できないなにかについて協力して読み取る経験を与える。ことに、これまで答えは一つしかないという固まっていた考え方にとって大きなショックであったとの感想を得ている。

教材：ジャヤスリヤの「鳩をもつ少女」⁽⁷⁾

内容：ジャヤスリヤの「鳩をもつ少女」の絵を見せ、この絵の印象、特徴は何かを考えてメモさせ、ひとつずつ挙げる言葉を順番に黒板に記して、回答が出なくなるまで続ける。その間、ブレイン・ストーミングの3原則（批判せず、自由に、なるべく沢山）を話して、緊張を解く。さらに、アイデアが尽きた頃、類推、逆転、展開、抽象化、具象化、突飛なアイデアなど基本的な発想法の手法をヒントとして述べ、新しい回答の切り口を与える。

簡単なブレイン・ストーミングを経験させることにより、自分の発想を制限するものを意識させ、それを広げるための発想法を学ぶ。面白いことに、文系的発想の学生は情緒的回答が多く、理系的発想をする学生は具象的、論理的回答をする傾向が顕著であった。

次回演習の始めに、全員が挙げた印象をKJ法により、マップを作成して全員に配布する。これを用いて互いに矛盾する印象がどのような関係にあるかを考えさせる。（例：明るい鳩の印象が少女の伏し目と色彩の暗い印象と同時に描かれているので、それぞれの部分の印象が矛盾するよう見えた。）

さらに、この全体像から、絵画の鑑賞にあたっての部分的、一面的印象のもつ偏りと絵画鑑賞の面白さを感じとらせる。

第3回 「二義的なかたち」

目的：観察の対象の答えは、常にひとつとは限らないことを意識させ、そのための意識的発見の経験をさせる。

教材：「ふしぎなえ」⁽⁸⁾、イリュージョン・フォーラムの各図⁽⁹⁾

内容：「ふしぎなえ」の森の中にかくれている動物を探す。

経験では、全員を前にして気がついた動物名を言わせるよりも、2、3名のグループごとにコピーを配布して行う方が参加意識は盛り上がる。

隠れ文字、隠れ形状、隠れ絵などを見せ、過去の経験が視覚認識を補助していることを理解させる。それとともに、その経験が純粹の認識を邪魔することもあることを述べる。さらにわれわれの日常の出来事における解釈の中にもこれが存在することを指摘する。

次に、二義的な文章でその内容がいかに異なるかを実感させる。「ふたえにおりてにかけるとじゅうず」、「ここではきものをぬいでください」（松岡⁽¹⁰⁾）、「いやよして」（松岡⁽¹⁰⁾）、「野次馬根性からノーベル賞を授与された日本人について、文化勲章授与とのタイムラグを調べてみた。」（千早⁽¹¹⁾）など。これにより、正確な文章における言葉の順序、句読点の位置の大切さを理解させる。

宿題：小説「藪の中」⁽¹²⁾を読んでくる。これは次回演習の予備的理解の準備のためである。

第4回 ひとによって答えはバラバラ、真実はなに？

目的：一つの事実について人間の解釈が多様であり、それぞれの人間の状況を反映するものであることを意識させる。同時に、現在、板書のみをノートに取る習慣の学生に観察メモを取らせる経験を与える。

資料：「羅生門」、（黒澤 明監督）ビデオ⁽¹³⁾

登場人物のおのおのが他の人物に対してどのような行動をしたかをメモさせるための書き込み用表

内容：映画「羅生門」の原作が小説「藪の中」であることを説明し、それぞれの人物の陳述における登場人物の行動をメモにとる。その違いが、この混み入ったあらすじの理解を助けることを述べる。上映時間が90分のため、説明は可能な限り短くする。場合によっては、スタートした直後に話してしまう。

映画の最後の場面、すなわち、木こりが捨て子を抱えて退場する場面は、芥川原作にはない場面であり、黒澤の主張がはっきり出ていることを指摘

し、それは何かを討論させる。(実質的には、時間が限られているので出来ない。)

宿題：配布資料にメモしたデータを次回までに完成して提出すること。

コメント：この映画のテーマがレイプであるので、もっと内容の明るい40分程度の長さの映画を利用したい。

次回の冒頭にこの宿題をまとめた一覧表を配布し、ひとつの事件をめぐるそれぞれの陳述とそれを表現しているそれぞれの仕草を結びつける。さらに、陳述する当人の事件の中での位置付けを討論する。これによって、人間の中にある自己保身、ひとつの事実の中にある真実とは何かを考えさせる。また、アンドレ・ジイド「狭き門・アリサの日記」⁽¹⁴⁾におけるアリサ、ジェローム、叔父、叔母、ジイドのそれぞれの立場から読んだ違いなどにも触れて物語を読む面白さと深さを教える。

第5回 図書館を利用する

目的：図書館は「本を借りる」、「本を読む」機能だけでなく、「本を検索する」、「資料を集める」、「データを確認する」、「資料に関する相談をする」場であることを知らせる。

内容：図書館側に委託して、ビデオ教材により、基本的図書館利用法の講義を受ける。なお、この際、辞書、辞典類のもつ働きについての説明に重点を置く。また、百科辞典は大学での授業の参考書として極めて豊富な情報源であることを実感させる。

宿題：各自の名前にちなんで与えられたテーマを各種百科辞典を用いて比較調査させる。この場合、漢和辞典、国語辞典なども利用してその楽しさを実感させる。また、同時に、調査資料明記の必要性とその理由について説明する。初年度は、所属学科に応じた1500～2000字程度のキーワード、例えば、俳句、マーク・トゥエイン、奴隷廃止運動、チモールなど。2年度は、夏みかん、愛、マリア、織姫、アンデルセン、なつめやしなどを与えた。

第6回 ジグソー・パズルを楽しむ

目的：ジグソー・パズルを用いて、一見無関係な断片から秩序だった絵を完成させる。この際、早く完成させることが目的でなく、その過程での心の

動きの観察，楽に早く完成させるための工夫をするように注意を与える。

内容：各自に220ピースのジグソー・パズルを配布し，これを完成させる。

資料：1. メモ用紙を配布し，開始から完成までの自分の心のつぶやきをメモにする。

2. 合図された時に取り組んでいる個所をメモにとる。

早い者は約15分から20分で完成できる。1割程度の遅い者は80分でも完成できない場合がある。早く完成したものはすでに完成している他のピースと交換して行わせる。経験を問わず，学生のほとんどはジグソー・パズルには没頭する。

開始して5分後に，画面のどこに注目しているかをメモさせる。開始後10～15分後（全体の平均が完成までのほぼ半分程度となった時点）に再びメモさせる。さらに，終了直前の個所をメモさせる。終了10分前に，メモを書いているか確認する。多くは夢中になって書くのを忘れている。

終了時に書きつけたメモを回収する。これは次回までにとりまとめ，プリントとして配布する。また，完成，または，止めるまでの過程を図1に示す。

図1で「我慢する」ポイントを明示する。そして，1) このような心理は誰にも共通であること，2) 「我慢すること」のもつ重要性を強調すること，3) 「行き詰まり」，「できた」のサイクルが面白いこと，4) 実はピースごとの組み合わせの中にもこのサイクルが存在することにつながることを自覚させる。

次に，いくつかの定法をこの方法に慣れている者に言わせる（まず，四隅のピースを探す。4辺に相当するピースを集める。似た色のピースを集める。特徴ある模様，または色のピースに注目する。最後では，ピースの形状に注意する。など）。さらに，それが合理的である説明を加える。四隅のピースは，2辺が直線で，全体で4ピースしかなく，一辺が直線である2ピースと組み合わせる。四辺に相当するピースはすべて一辺が直線であり，2ピースとのみ組み合わせる。似たピースは近い位置にある可能性が高い。特定の色彩，模様のピースはモデルによってその位置が同定しやすい。

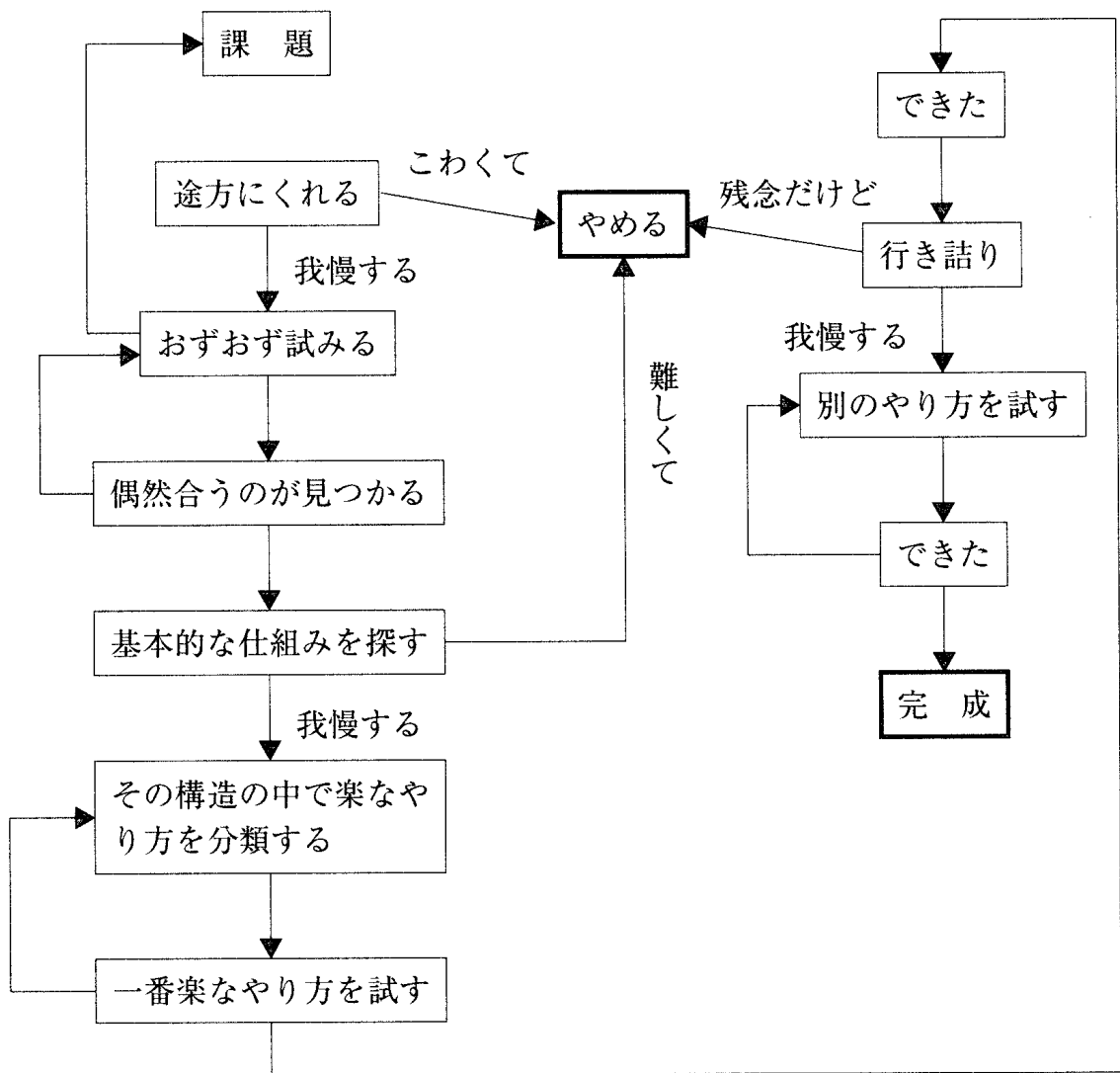


図1 ジグソー・パズルを作り上げる過程図

第7回 分類する

目的：複雑な現象や資料に直面するとき、誰もが全体を把握できないことにパニックになる。しかし、それを分類することによってその内容が明確になってくることを把握させる。

資料：1. 次の言葉の組を分類させる。(それぞれを各グループに渡して、その結果を言わせて黒板に書く。)

例：「バス、水中翼船、客船、トラック、自動車、ヘリコプター、潜水艦、ジャンボ、ロケット」,
 「しそ、パンジー、ポピー、ラベンダー、りんご、薔薇、アボガド、桃、ジャスミン、カモミール」,
 「エジプト、アメリカ、中国、ペルシア、土佐、アビシニア、シャム、秋田、ヒマラヤ、シベリア」,
 「ぶど

う酒, ジャガイモ, ウイスキー, ほうれん草, コーヒー, ジュース, ローストビーフ, ミルク, にんじん, 鶏肉, ビール, ポーク」, 「カイロ, ブラジル, ヨーロッパ, イタリア, 東京, 南アメリカ, アジア」, 「バナナ, いちご, ヒマワリ, サルビア, とうがらし, レモン」

これは図形を用いたものでもよい。

分類には, 多種の分類が可能な場合がある。予期しない分類がその要素の一つによって必要となる場合があるを理解させる。分類が, 絵の印象 (第1回), ジグソー・パズル (第6回) のゲームにおいても重要な役割を持っていることを指摘し, 論理的認識において重要なプロセスであることを指摘する。

2. 次に, 主題に関するいくつかの説明の中に主題に適さない項目を指摘させるゲームをする。

「小型車にはいろいろな利点がある。」: 1. 値段が安い 2. ガソリンをくわない 3. 駐車しやすい 4. 足がつかえる車がある

「外国に行くのは面白い」: 1. 新しい人々に会える 2. 色々な料理が食べられる 3. お金がかかる 4. 他のひとびとのやり方がわかる 5. 思いがけない景色に出会う 6. すりにパスポートをとられる

「喫煙はよくない」: 1. お金がかかる 2. ガンになる 3. いろいろな銘柄がある 4. 他の人に迷惑がかかる 5. 火事の原因になる 6. 吸殻の捨て場所に困る

「恵泉はいい大学だ」: 1. みんなが生き生きしている 2. キャンパスは緑でいっぱいである 3. 先生は学生のことを大切にする 4. 園芸実習がある 5. 多摩センターからバスで通う 6. キャンパスは多摩市にある

「ニューヨークでは沢山することがある」: 1. 沢山の博物館がある 2. アメリカ文化の中心地である 3. 多種多様なひとがいる 4. おいしいレストランがある 5. 有名なホテルがある 6. 図書館や大学がある 7. お土産屋さんがいっぱいある 8. すてきなミュージックホールがある⁽¹⁵⁾

「人によって自由な時間の過ごし方は違う」: 1. 沢山の人は映画館へ行

く 2. 映画の入場料は高すぎる 3. 寝転んでテレビを見る 4. スポーツを楽しむ 5. ショッピングに出かける 6. アルバイトでお金を稼ぐ⁽¹⁵⁾
この回答についての理由の分類を行わせる。

主題に反する場合，主題の一部のみに関係するが主題の方向とは関係ない場合，主題に関係するが，その判断が主観と関わる場合，主題に直接の関係はないが，間接的に関係する場合などが出てくるが，これらによってその違いが明確になることを強調する。

第8回 4コママンガを並べる

目的：ばらばらのマンガの絵や簡単な詩からその順序を推定する。これにより記述には順序があり，それを示すサインが必ず存在することを気づかせ，コミュニケーションにおけるポイントであることを認識させる。さらに，推定した順序を崩して，新しい筋書きを工夫する。これにより，創作の経験を持たせる。

資料：1. 各コマをA4判大に拡大した4コマを各グループに配布する。

スヌーピー⁽¹⁶⁾，シッタカブッタ⁽¹⁷⁾などから吹出しのなるべく無い4コマのストーリーを用いる。⁽¹⁸⁾図2はその1例である。

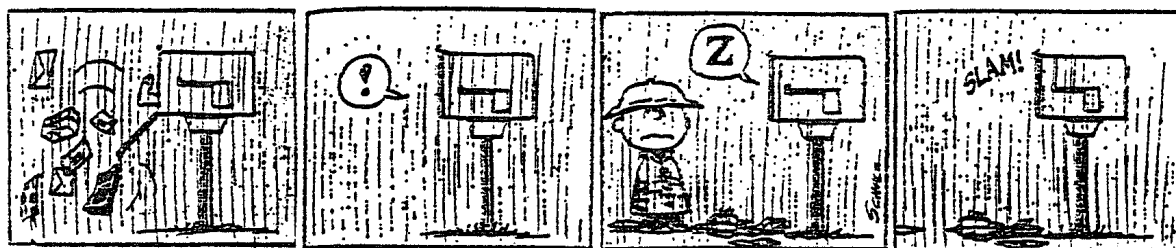


図2 スヌーピー漫画の順序を探す⁽¹⁶⁾

2. 各種の4連詩について同様に行う。これには，金子みすず，八木重吉，千家元麿，立原道造らの詩を用いる。

例：次の4つの文を正しい順序に直して一連の詩にして下さい。1. そっとさわってもこわれそう，2. りりしくはあるけれど，3. いつも秋のよう，4. わたしのころは

3. 5パラグラフでまとまった文章についても同様に行う。これに

は、松浦寿雄「レトリック－Madonnaの発見、そしてその彼方」⁽¹⁾の“マドンナを発見する”や松岡⁽¹⁰⁾の文章をパラグラフごとにプリントしたものをを用いる。

内容：ここでは、論理シーケンスを注意して推理する力をつける。そのために、対象を注意して観察し、時間や論理の推移を発見する手かかりは何かを質問して意識させる。場合によっては、別の回答もあり得ることも許容する。

さらに、順序をばらばらにして新しい創作の努力をする。そして、このような作業は、広義の「編集」⁽¹⁰⁾であり、実社会における編集の役割を説明し、大学におけるレポートの意義をこれと結びつけて理解させる。詩、文章についてはその中の順序を決める鍵となる言葉、句を指摘させ、その働きを理解させる。

第9回 道しるべ

目的：他人に情報を伝達する場合には、その情報を相手に理解しやすい配慮が必要であることを認識させ、その言葉の使用を試みる。

資料：1. 誤解されやすい標識、看板の例を OHP で示す。⁽¹⁹⁾

2. Topic sentence の意味を説明し、その例をあげる。⁽¹⁵⁾これには、新聞ニュース記事のコピーを用いる。

内容：1. 道路標識の例では、ドライブする車の助手席で道筋をドライバーに指示する役をわりあて、目的地に向かうために誤解しやすい標識のどこを改善すべきかを議論させる。2. 配布した新聞ニュース記事について文章の構成を分類させる。さらに、スペースの大きさに応じた記事構成の工夫をさせる。その理由を述べさせ、読者にとって筆者が意図している内容をもっとも効果的に伝える文章構成であることを示す。3. 以下の小文を示し、そのトピック・センテンスに相当する文を作らせる。さらに、これは文章の題目のもつ役割であることを理解させる。

例：「飛行機は6時間遅れた。泊ったホテルは最低で、3日目には財布をすられ、カードがなくなった。毎日、雨にたたられ、そうでなかったたった一日には、太陽を浴びすぎて顔が真っ赤になった。」これに次のどのトピック

ク・センテンスが合うでしょう。1. なぜ赤い顔をしているのって聞かないで。2. 私は何も買えなかった。3. 今度の旅行はひどい目に会った。(15)

4. 大学から自分の家までの道筋を、老人に扮した教師に口頭で説明させる。それを聞きながら、黒板で理解した地図を書きこむ。その際に、説明の足りない部分を問いなおして、「道しるべ語」を確認する。このことによって、「道しるべ語」の大切さ、相手のレベルに立っての説明の大切さ、定性的でなく定量的であることの大切さを理解させる。なお、解説の際に、直接主題に入らない東洋的表現法と西欧的表現法（ビジネス的表現法）の違いを簡単に触れる。(20)

5. 以上のまとめとして、配布した白紙に大学から自分の家までの地図を書かせる。宿題として完成させたものを提出させる。

説明：ここでは、情報の発信はその受け手が理解できないと意味が無くなり、かえって誤解を生じてしまう発信者の責任を意識させる。そのための技法としての「道しるべ語」、接続詞の働きの大切さを示す。

第10回 手紙の書き方

目的：実用的な文章として一番身近な手紙の作法を身につけさせる。

資料：基本的な手紙の書き方（例えば、国語辞典の付録など）を要約して配布する。

内容：今回の内容の実践を今期のレポート課題とすることを述べ、配布資料の説明を行う。ことに、現代の若者にとって手紙を書く機会は極端に少ないので、実際社会における文書のもつ意味を強調しながら説明する。

宿題：次のようなシチュエーションで手紙を書き、定められた期限までに提出しなさい。なお、この内容は必ずしも現実のものである必要はまったくない。自由な創作を歓迎する。

あなたには高校時代に親しくしていた男性の友人がいるが、大学入学以来一度も会っていない。二人が会える機会を作ってくれるように担任教師に依頼する手紙を書く。

なお、次の条件を満たす必要がある。1. 依頼する相手は、自分の教師であるのでそれなりの礼儀をわきまえた内容と表現が必要である。2. あな

たとあなたの友人についての知識はふたりしか知らない。3. 教師の立場として当然納得できる理由が必要である。

この内容は学生にとって刺激的なため、いろいろと工夫して一生懸命に書いてくる。そのため、コメントをつけて返却しても、それを読みなおしてその書き方を会得するチャンスが多い。

第11回 レポートの書き方

目的：レポートとは単なる感想文や調べた資料の羅列ではない。それには調べたことの方法、範囲、内容、その価値の判別、より深い内容のための方向付けが、その読者に的確に伝わる必要があり、その読者がそれによって何らかの意志決定をおこなうことのできる文書であることを理解させる。そのためには、ほぼ一定の書式と表現を守る必要があることを認識させる。

資料：基本的報告書の書式のOHP、これを縮小コピーして配布する。

(OHP映写のみでは、学生はメモを正確に取る習慣がない。)

新聞の論説切りぬきコピーを配布し、その文章の中のトピックス・センテンス、導入、本文、結論を示すパラグラフを指摘させる。具体的には、「『狂う』ってどういうこと?」、角田光代、2001/4/28 朝日新聞朝刊、「ビジネスマンの思考一新講座」、グレン・フクシマ、2001/4/28 同朝刊、「薬の診察室－解熱剤③」、浜六郎、2001/5/5 同朝刊、「花めぐる人の愚かさ、滑稽さ」、新妻昭夫、2001/4/29 同朝刊、ニュース記事「産業廃棄物家庭ごみ用炉で焼却」、2001/5/5 同朝刊

内容：まず、報告書の持つべき性格を述べ、さらに、報告書を書く作業は、これまで学習してきた本演習の総括的な応用であることを付言する。次に、事実と意見、引用、推測、主張の区別、図と表の意図とその表現法、文献資料の意味とその表示法を説明する。また、晦渋な文章は必ずしもフォーマルなものではなく、むしろ、明解なやさしい文章こそが求められるべきものであることを理解させる。

授業レポートについては、出題意図とその授業内容との関わりを推理し、その理由を確認すること、用語の定義、前提となる約束を明確にしておくこと、テーマに関しての基礎的知識を確認すること、そのレポート作成のため

の筆者の努力と意欲の表現，参考書の引用明示が大切であることを述べる。この説明に用いる OHP は必ずコピーを作って配布し，作成の際に学生が見なおせるようにする。

この時期になると，履修している他の科目でのレポート出題が多くなり，これに関する学生の関心は非常に高くなる。従来は，レポートの書き方やその役割，期待されている内容についての指導はほとんどないままに提出後のレポートの採点，コメントによって学生は体系的でなく学習していた。むしろ，レポート作成前のなるべく早期に報告書の性格，書式，そのためのルールを意識させ，卒業までにはそれが身につくようにすべきである。

第12回 試験答案の書き方

目的：論文式筆記試験の答案のポイントについて述べ，出題者の側の期待（読者の存在に対する配慮）を意識した文章が必要な理由を理解させる。

内容：1. OHP を用いた講義形式

2. 実例として本演習に関する問題を提出し，その解答を書かせ，それを簡単に講評する。

試験の準備：出題範囲の講義目次を作成する。それ全体の流れの中で基礎的な用語概念の定義と約束を列挙する。流れを構成するものは何か，なぜか，考えてみる。出来れば，講義で挙げられた参考文献を参照してそれらを深める。

答案用紙を前にして：問題が何と何を問うているかを注意して読む。書くべき時間の半分はメモとその整理に用いる。まず，思い浮かぶ事項をなるべく広くメモする。それらの事項の相互関係をつける。その関係を自分の常識と比較して客観視する。再度，出題の問いと意図を確認してから，文章を作成する。その際，トピックス・センテンスを工夫し，きれいな読みやすい文字と文体を心がける。

ここでも同様に学生にとっては試験がまじかで切実であるので講義形式でも熱心に聞く。また，論述試験の経験が極端に少ないので暗記に偏りがちな努力を講義内容の本質の理解へと導く方向を与えておくことがそれ以後の受講態度に影響する。

Ⅲ. 結果と考察

演習全体にわたって学生の参加意欲は極めて高く、個人的に終了時におこなった18名の授業評価アンケートでは以下のような結果であった。質問項目はスタンフォード大学における5段階評価の質問項目にもとづいて作成したものである。

まず、講義の難易度についての回答は、難しい(-2), 2: やや難しい(-1), 1: 難易なし(0), 7: やや易しい(+1), 2: 易しい(+2), 6, 内容の面白さについて、面白くもつまらなくもない(0), 2: 面白い(+1), 5: 非常に面白い(+2), 11, 有益度について、有益でも無駄でもない(0), 1: 有益だった(+1), 7: とても有益(+2), 10, 講師の態度について、話し方は、とても難解(-2), 1: 難解(-1), 1: 丁度よい(0), 1: 易しかった(+1), 5: とても分かりやすかった(+2), 10, 学生への配慮は、あまりなかった(-1), 1: 普通(0), 1: 非常にあった(+2), 11, 声の大きさは、普通(0), 1: よい(+1), 4: とてもよい(+2), 13, 教材は、普通(0), 3: 役に立つ(+1), 7: とても役に立つ(+2), 8であり、総合評価の平均値は84点であった。この内容を評価するとおおむね学生にとっては好評であったと解釈できる。実際に、次学期の受講希望者は定員の3倍にも達したことでそれを証明している。また、講義難易度については回答分布の広がりが大きいのに対して、内容の面白さと有益度についてはプラス側に寄っていることから知的なチャレンジも与えることが出来たものと考えられる。

点数評価と同時に次年度のために、内容、教育技術、講義内容についての筆記意見を求めた。授業内容については、マイナス面では、学生の余計な発言を容認している。教室の大きさと人数の不釣り合い、ディベートの機会が少ない、小論文などの具体的指導が少ないなどの意見があった。これについては楽しみながら学ぶ雰囲気を維持することを心がけたために全員に対する解説の際に話しに注意を向けさせる厳しさが足りなかったと反省している。本演習の内容は、通常、10名以下を想定していたが、実質20名を担当することと

なった。このために、同種の異なる問題数を多くしたり、2、3名のグループをつくるなどの工夫をしたが、さらなる工夫が必要である。

授業内容のプラス面では、全体の内容が一貫していること、頭を使ったという満足感がある、多面的に物事を考えるとを発見した、創造力、想像力、判断力を使った、具体的なレポートの書き方が役立つなどの回答があった。

その後、受講した学生に内容が役に立っているかを質問しているが、ほとんどの学生はなんらかのプラスの返事をしている。

それぞれのテーマについても、最終の論理的創造的報告書の作成を意図して統一を図り、ゲーム性を多くしてその主題の目的を解説し、さらに、文学、絵画などの鑑賞法などすべてが同じ人間の知的活動であることを極力意識させたことがこのような結果となったものと思われる。

本来ならば、これに引き続き、さらに高度のトピックス、具体的には、レトリック・クイズ、より複雑な論理クイズ、文章比較、ディベート法、作文法、論文作成法などを扱う演習を接続させて、より高度の知識開発能力の開発する機会を備えるべきであろう。

IV. おわりに

現在の大学は大きな変革の場に立たされている。ことに学生数の減少にともなう入学生の質的变化はかつてないほどで、主として暗記した知識を短時間に回答することによって評価される高偏差値の学生とは異なるタイプの潜在的能力を持つ学生を大学において育てることが可能となりつつある。これまでの初等中等教育および大学受験勉強において無視されていた人間にとって必要な能力を学生たちから引き出し、それによって学生自身の能力を自覚させることがその大学の独自性を保つ新しい道でもある。それは実際に大学卒業時に社会において必要とされる能力であると同時に、豊かな人間性にとって必要な教養を生み出す能力であって、これまでの教育が忘れ去ってしまっていた想像力、創造力、解析力、発表力の育成を特に意識した教育がこれに応えるものとして強調されなければならない。なぜならば、かつての中世の Trivium は、まさにこのカリキュラムの目指すところであった。知識

の急激な拡大によって古典的形式的な trivium は教育の片隅に追いやられたが、現代では、あまりにも多い情報量がこの精神の教育を逆に必要としていると言えるであろう。

注

- (1) 小林康夫, 船曳建夫編, 『知の技法』, 東京大学出版会, 1994.
- (2) 島田 彌, 「企業が求める人材像と企業内教育の展開—自主性, 創造性喚起の考え方と方策」, 『技術と経済』, No. 374, p. 10-18, 1998. 4.
- (3) マリリン・バーンズ文, マーサ・ウェストン絵, 『考える練習をしよう』, 左京久代訳, 晶文社, 1985.
- (4) ロジャー・フォン・イーク, 『頭にガツンと一撃』, 城山三郎訳, 新潮社, 1984.
- (5) 川喜田二郎, 『続・発想法—KJ法の展開と応用』, 中公新書210, 中央公論社, 1970.
- (6) 星野 匡, 『発想法入門』(新版), 日経文庫402/12, 日本経済新聞社, 1997.
- (7) ナリニ・ジャヤスリヤ, 『サツテア—詩と絵による黙想』, 日本基督教出版局, 1986.
- (8) 安野光雅, 『もりのえほん』, 『ふしぎなえ』, 福音館書店, 1971, 1981.
- (9) イリュージョン・フォーラム,
<http://www.brl.ntt.co.jp/IllusionForum/index.html> 2000.
- (10) 松岡正剛, 『知の編集術』, 現代新書1485, 講談社, 2000.
- (11) 千早耿一郎, 『悪文の構造—機能的な文章とは…』, 木耳社, 1988.
- (12) 芥川龍之介, 『地獄変, 偷盗』, 新潮文庫
- (13) 黒澤 明監督, 『羅生門』, ビデオ版, 大映, 1950.
- (14) アンドレ・ジイド, 『狭き門・アリサの日記』, 新潮文庫
- (15) Karen Blanchard, Christine Root, “Ready to Write”, Longman, 1980.
- (16) Charles M. Schulz, “Take it easy, Charlie Brown”, Fawcett Crest

Book, 1967.

- (17) 小泉吉宏, 『なあんでもないよ』, ブッタとシッタカブッタ 3, メディアファクトリー, 1999.
- (18) 子安増生, 『心の理論—心を読む心の科学』, 岩波科学ライブラリー 73, 岩波書店, 2000.
- (19) 藤沢晃治, 『「分かりやすい表現」の技術』, ブルーバックス B1245, 講談社
- (20) Trudy Smoke, “A Writer’s Workbook”, 2nd Ed., St. Martin’s Press, New York, 1992.